

宮古島市立北小学校。

4月12日の年度当初に1度訪問させていただきました。4月当初では、前年度からの「学び合いの授業」が高学年において、確実に子ども達によって引き継がれていることに感心させられました。

今回は、「学びの共同体」スーパーバイザーである、東京麻布教育研究所の村瀬公胤先生と永島孝嗣先生の2名の先生が同行し、さらに、国頭中学校の神元校長と渡慶次先生（教務）の計5名での訪問となりました。5名ですうすうしく押しかける形の訪問になりましたが、北小の校長先生はじめ職員の皆様の暖かな受け入れに心より感謝いたします。

さて、本日の公開メニューは2校時の1・2年生（4クラス）の授業公開から、5校時の研究授業（4年2組）まで、まる1日、おいしい昼食をはさんでの公開授業と研究協議会が進められました。

『一つ残らずすべての教室を開き、授業を観てもらい批評を仰ぐ！』素晴らしい理念とビジョンの実践でした。



【1年1組】 『くじらぐも』



教師たちの挑戦である。机の配置をコの字にし、教師はテンションを下げゆっくり、静かに、ていねいに心をかけている。『やってみよう』と挑戦している姿がうれしい。まずはやってみる事です。同僚と不安や疑念を共有しながらでもゆっくり進みゆくことです。後ろの掲示物の色の鮮やかさ！楽しかったであろう、子どもたちの姿が目につく。

【1年2組】 『くじらぐも』



低学年はそもそも難しい。グループよりもペアによる「学び」の広がりや深まりに期待したい。「なんで〜」「どうしたかな〜」。45分の授業の中で10回ぐらいはペアでの話し合いに下ろしたい。余計だが退屈させないためにも、「互いに語らせる」行為が大切である。低学年は「教師の話聴く」の限界が個人差はあるがかなり短い。仲間にあずけてみる事が大事である。低学年の最大の敵は『退屈』

【2年2組】 『かけ算(1)』



このクラスは全く違和感なく学び合っている。静かにボソボソ笑顔で語られている。子ども達のトーンも低い。教師のトーンがまた学び合いの教室にぴったりのテンションである。ただ一つ、発言者の視線が教師に向けられているのが気になった。しかし、これからである。左の写真の二人の様子を見てほしい。この風景が「しっとり」である。

【2年1組】 『かけ算(1)』



この教室でも、子ども達が違和感なく学び合い、支え合っている。写真の教師の寄り添いに「安心」を感じる。教室のほとんどのペアで写真のようなシーンが見られた。学び合い、支え合い、分かり合う「学びの快樂」へ入り込んでいく仲間達である。子ども達は「教えられる」より、難しい課題を自分たちで「分かり合う」ことを望んでいる。

【3年2組】『ちいちゃんのかげおくり』



こちらでも教師ががんばっている、挑戦である。この字にし、グループに下ろす。「ほんとに話し合ってくれるだろうか?」「おしゃべりにならないだろうか?」教師の不安や疑念を超えた挑戦がある。おそらく教師が思っていた以上にお互いの意見を「聴き合っている。」のではないだろうか。

【3年1組】『ちいちゃんのかげおくり』



写真①

写真①、教師のテンションが低い、言葉も「語りかける」様なしっとりとした言葉である。授業中に子どもの言葉が重なりそうな時に制止させる行為や、教師に向けられた疑問をさらに仲間もとして「仲間につなぐ」行為が何度か見られた。写真②、テーマが下ろされると、みんな素直に聴き合っている。決して「言い合っていない」互いの「何で?」を共有している。各々の考えが広がる、深まるである。



写真②

聴き合うきっかけとなるテーマを準備すること。子どもの言葉からつなぐことが肝心である

【4年1組】『ごんぎつね』



素敵な教室である。



写真③

このクラスもよく聴き合っている。子ども達の「不思議、疑問、気になる。」が共有される。仲間の考えや疑問を聴き入れ自分の考えに重ねて新たな自分の考えが内化されていく、仲間の言葉からの変容である。

写真③、各教室で大型教科書の活用が当たり前に行われていた。さて、この教科書の拡大版の有効性はなんだろう?一人で自分の考えを教科書に書き込むことと、みんなで仲間の考えを共有することの意義はなんだろう。何が違うんだろう。ぜひ校内研修等でテーマにしてほしい。

【4年2組】『面積』 びっくりである。9月からの非常勤とのこと。実にしっとりしている。子ども達も安心しきっている。「分からない」「何で?」が自然に対話されている。なぜ…?



一学期までの少人数加配のベテランの教師の「学びづくり」が簡単に若い教師に引き継がれている。簡単な話、学級の関係がいいからできる。担任とこの学級に関わる教師との関係がいいからできるのです。学級経営なのです。それにしてもいい、左の写真、発表のためにグループ全員で前に出てきたが、「どう説明するか?」で、また吟味する仲間達である。



ゆっくり待つてあげる教師の配慮に子ども達も安心する。さて右上の写真算数的活動「協同的な活動」と言ってもいいのではないだろうか。向かいの女の子と一緒に長方形の辺の長さを探る作業しているところである。手前の二人の子も作業の成り行きを気にかけて見ている。これも分かり合う支え合う行為である。理屈抜き身を乗り出して夢中になっているのである。



研究協議会終了後に思わぬ知らせで職員室に拍手が起こった。なんと、採用試験 2 次試験合格の知らせがあった。素直におめでとう。です。

【5年1組】 大造じいさんとがん (4)の場面を読む



このクラスは4月にも拝見させて頂いた。今日もなんの違和感もなく聴き合っている。授業者は、国語のジャンプが見られたかつかみ所が探せず迷っているようだが、ジャンプという見方より、仲間達の多様な考えから、自分の心に変容や新たな知識の内化があり、自己の昇華があったかに視点を当てた方がよい。人によっては、文学はジャンプではなく文に親しみ、自己の広がりや深まりを持つこと

であるという。広がりや深まりは仲間との対話がなければ起こらない、深まりは文そのものからであったり、他者の考えから新たな自己への問い直しの中で起こる。次の悩みは、この「変容を何で確かめるか？」である。一様の解答はないと考えるが、授業中での対話の中でも子どもの変容を見ることもできるし、国頭ではよく、最後に音読を入れ、子ども達がどう読むかを聴いてほしいと言っている。さらに書き込み等はポートフォリオ評価としての評価資料にもなるのではないかと。しかし正直なところ文学の「読み」では評価にはあまりこだわりたいくない。評価にこだわると必ず教師の意図とする回答や対話に縛られる。子ども達が自由に「文学を楽しむ」からそれて、分かるための文学教材になってしまい、先生がほしがらる答え探しの学習になってしまいます。以下佐藤学先生の言葉です。文学は子ども達にとって「ご馳走」である、正しいも間違いもない、「おいしいかどうか？」である。そのおいしさも教師が決められない、味わう子どもはすべて違うのだから。各々で味わい方が違う、だからいい。(ゆいのHPに石井順治先生と佐藤先生の講演会のメモがあります『文学に親しむ』だったと思います、ぜひ一度読んでみてください。)

【6年1組】 『速さ』 速さを説明する



学び合っていましたね～。安心しました。前回訪問の時は、授業の様子がうかがえなかったので気にしていました。今日は課題をグループの仲間で「やり遂げよう」の姿勢がどのグループからもうかがえました。

算数における「学びの質」については校内研等で、同僚に各グループにはりついてもらい「対話」の内容から探ってってください。授業中に授業者が対話の質を採るのは算数ではかなり厳しいです。

さて、今日のジャンプ課題なのですが、実にすばらしい課題でした。学力とは「学んだ」ことを活用して課題を解決することができた時に意味をなすものです。340÷2=85? ですね。授業者がこの間違いを皆に共有させたことがよかった「仲間につなぐ」ですよ。時間がなくて次時へととなったが、私の目の前のグループでは、的確に間違いを指摘し(なんで間違いを起こしたかまで)さらに、「こうするんじゃない」と考えを交流していました。「明日、必ずみんなに伝えてよ。」私も一声かけて授業終了でした。

全体共有の時、子ども達の声重なっていることが気になりました。一人ずつゆっくり聴いてあげてください。すぐ慣れます。教師も、子ども達も楽な声で話せるようになります。しっとり静かになります。

【6年2組】 『やまなし』 この教室の第一印象「教師が授業を楽しんでいる。」でした。



素敵な発問がありました。「今日はみんなカニです。」おもしろい。この言葉を聞いた子ども達も笑いながら受け入れている。決してバカにしたような笑いではない、笑顔である。「子どもも、教師も幸せだな～」しばらく余韻に浸っていました。観ている私が癒されて、別に授業など、と思ってしまうような素敵な教室の空気を満喫してしまいました。

気を取り直して。さて、対話のきっかけ。学びの深まり。聴き合うための発問を準備しておくことは大切である。対話が滞ったり、学び合いに躓きが起こった場合など、対話や学びのきっかけとなる発問である。今日は素晴らしい発問が準備されていた。「『やまなし』というタイトル、何で『カワセミ』にしなかったんだろう？」教師の発問である。これも正解も間違いもない面白い発問である。どんな発問がいいか決まりはありません。教師がテキストを読み込み、子ども達の文学への親しみや、広がりや深めるきっかけとなればいいのです。

子ども達は指導書等書かれていることよりはるかに発想が豊かです。教師の素敵な発問でもっと豊かに文学に親しんでいくのです。リフレクションシートNo.91 安田小学校のシートの挿絵への書き込みを参照してください。我々大人が反省させられますよ。終わりに、授業はセンスです。発問は教師のセンスで採せ!

北小の先生方、ほんとうにありがとうございました。素敵な授業をいっぱい拝見させていただきました。なんといっても、職員皆さんが「挑戦」していることに感銘を受けます。若い教師からベテランの教師まで皆が一つの方向に向かう。「これまで」を断ち切り「これから」を生きていく子ども達のために。教師達のじみで淡々とした静かな挑戦です。ほんとにお疲れさんでした。この状況を一番うれしく思っているのは間違いなく校長先生ですね。北小のさらなる同僚性の高まりに期待します。 国頭学びの会ゆい

(1) 単元名： 《読む》 場面の様子を想像して読む 『ごんぎつね』

(2) 本時の目標： 六の場面

校内のすべての教師が参加しての校内研修の代表授業である。「学びの共同体」の研修スタイルで諸グループに担当の教師が張り付き、授業後の研究協議ですべての教師に語ってもらう。

2~4校時まで、各教室を開き、さらに5校時に代表授業。先生方も、多少疲れ気味かと思っただが授業も研究協議も大いに盛り上がった。授業者に敬意が払われ研究が深まる。

『学校改革は、すべての教師が教室を開くことから始まる。』

佐藤先生の言葉が思いだされる。



(時間は時刻)

14:15 授業が淡々と始まる。



机をコの字に配置し、教卓が取り払われ、黒板の全面が子ども達に開かれる。教師は椅子に座り、語るような声かけで子ども達の考えを受け入れていく。教師の「発信から受信」「聴き合う」姿が子ども達を安心させてくれる。国語の授業では定番の大型教科書が使われ、仲間の考えをみんなで共有する。



子どもの表情をうかがいながら聴く

14:18 6の場面音読する

14:20 書き込み

14:23 グループで話し合う



写真①、各々自分のペースで音読する(1回)。親しむ、深めるに読むという行為は絶対不可欠である。できれば、形を変えて3回ぐらいは読ませたい。写真②、書き込みの時も子ども達は、自然にぼそぼそ聴き合っている。私の前のグループでは同じところに線を入れて互いに見合っただけでニコニコしている。同じであることへの「安心」かな? 写真③、対話(学び)の質を探る。担当した教師がグループの仲間同士の対話から学びの質を探る。▲それぞれの活動の時間が短いのではないだろうか。テキストとの対話は「読む」「書き込み」という行為でじっくりさせたい。自分の気づきや疑問を深める時間でもある。

読む→書き込む→全体での共有まで(およそ15分~20分)国頭では、読むに10分、書き込みに10分ぐらいを勧めている。当然、状況や内容によって様ではないを前提にしたい。(教師の見取りが大切)

【入り込む】と【あきらめる】→両者をつなぐ

手前の女の子はお話に入り込んでいる。男の子は、消しゴムでござござ!

ケアが必要である教師が両者をつなげることが解決になったかもしれない?



【話したいことがいっぱい】

何かと話に突っ込んでくる。どこにでもいる子です。悪気は全くなしです。こういう子をどう活かすか? 規制や排除ではなく、受け入れ方を研究したい。いい子ですよ。



N先生、代表授業という大役を終えて今は「ほっ」としているところでしょうか、お疲れさん。素敵なクラスです。右の写真、3校時の算数の授業です。夢中になって身を乗りだして「なぜ」を追究している子ども達です。夢中になって「分かり合う」ことが許されるクラスだからできるんですね。4月当初から「なにか違う空気を持ったクラスだ。語りたがっている。」その後の先生の姿勢と、日常がはっきりうかがえた公開授業でした。「学びの快樂」を知る子どもに育てたいですね。ありがとう!



国頭学びの会ゆい